第三章　藤壺の物語　藤壺女院の崩御

［第一段　太政大臣薨去と天変地異］

*そのころ、太政大臣亡せたまひぬ。　*注に＜源氏の岳父、太政大臣。「澪標」巻に六十三歳とあったから、六十六歳で死去。『完訳』は「同年齢で死去の関白太政大臣藤原頼忠が想定されるか」と注す。＞とある。この注の穿ちに丸々は乗り切れないが、この物語に歴史資料価値を求める読み方は面白い。登場人物の設定に実在した貴人が参照されていることは間違いないので、少なからずその要素はあるだろう。ただ、当時の人々にとってこの物語は現代劇ないしその下話として語り聞きされていたのだろうから、特に藤原頼忠と限定しなくてもその時代背景を、律令国家の形骸化と荘園受領の台頭と共に現れる藤原氏の摂関政治による王朝文化の醸成期、とする認識は妥当に思える。907 年に唐が瓦解して、その後約 50 年間大陸は分裂した。そして 960 年に宋が建国され平安朝は手探りで外交を再開する。が、894 年の遣唐使廃止後の平安期の基本は、農業生産の効率化を現地管理で図る内政の時代だったに違いない。そして、その内部留保で道路整備が進み一気に世界が近く開けた、という事情は国内よりも大陸の方が大規模だったようではあるが、次第に新たな軍事政権の出現と軍事技術の開発が世界的に進んだ時代でもあったのだろう。

世の重しとおはしつる人なれば(政府の重鎮として仕えていらした人なので)、朝廷にも(おほやけにも、帝も)思し嘆く(御嘆きあそばします)。しばし(朱雀帝代のしばらくの間)、籠もりたまひしほどをだに(出仕なさらず家に閉じ籠っていらした時でさえ)、天の下の騒ぎなりしかば(国中が動揺したので)、まして(亡くなったとあっては)、悲しと思ふ人多かり(悲しむ人が更に増えました)。源氏の大臣も(げんじのおとども)、いと口惜しく(大変に残念で)、よろづこと(全ての政務を)、おし譲りきこえてこそ(お任せ申してこそ)、暇も(いとまも、ゆとりも)ありつるを(持てたものを)、心細く(気弱にもなり)、事しげくも思されて(仕事が忙しくなることも重荷に思われて)、嘆きおはす(嘆いていらっしゃいます)。

*帝は、御年よりはこよなう大人大人しうねびさせたまひて(御年の割にはずいぶんと大人びて御立派でいらして)、世の政事も(よのまつりごとも、祭式行事のお勤めには)、うしろめたく思ひきこえたまふべきにはあらねども(御心配申し上げるようなことはありませんが)、またとりたてて御後見したまふべき人もなきを(そうかといって自分を措いて他に政務の後ろ盾となるような人もいないので)、　*注に＜冷泉帝十四歳。＞とある。

「誰れに譲りてかは(誰に太政大臣の地位を譲ったとしたら)、静かなる御本意もかなはむ(出家して静かに暮らす御許しが得られるだろう、いや譲るに足る者など誰も居ない)」と思すに(と光君は御思いに成れば)、いと飽かず口惜し(実に残念でなりません)。後の御わざなどにも(そして葬儀や法要にも)、御子ども孫に過ぎてなむ(御子息や御孫たち以上に)、こまやかに弔らひ(念入りに弔って)、扱ひたまひける(手配なさいます)。

*その年、おほかた世の中騒がしくて(この年は京都一帯が嵐に見舞われて)、　*注に＜『完訳』は「永祚元年（九八九）の史実によるとする説もある。前掲頼忠の死も同年」と注す。＞とある。控え目なのか、不親切なのか、いずれにせよ良く分からない注である。ただ、この文を＜その年は全体に騒乱があって＞と言った

だけでは、当時の人が想起できた＜騒乱＞の中身を現代人は想起出来ないので、十分な言い換えには成らないことは確かだ。Wikipedia に永祚(えいそ)元年の出来事として＜8 月 13、近畿地方を猛烈な台風が襲い大被害が出た。この被害により、翌年（990 年）正暦(しょうりゃく)に改元された。＞との記事がある。文の収まりがいいので、一応そのように言い換えておくが、岳父の死は 1 月末か 2 月初め頃かと思われ、この文の「その年」が鴨川の氾濫を受けたものとも見做せない気もする。むしろ当時の世情の底流としては、尾張国司であった藤原元命(ふじわらのもとなが)の解任請求が 988 年に現地豪族から太政官に提訴され、元命が永祚元年の除目で尾張守を解任された、と言う史実が注目される。受領の台頭は地方豪族との軋轢を乗り越えて進んだらしく、それが「おほかた(全般に)」表面化した政情不安だったと読むことも出来そうな気もする。およそ律令国家は外交で先進技術を知ったが、同時に先進国の脅威も知り、対抗策として諸豪族を統一するために中央集権を志向した。出来上がった中央政府は先進技術で地方支配を始める。そして地方官はその先進技術で農業増産を進めて、更なる管理の効率化を図っては内部留保を、幸か不幸か中央の情報管理の未熟さも相まって、現地判断での道路や水路の開発に振り向けて、結果として次第に自治権を拡充させて豪族化する。この繰り返しは、いつか来た道にも見える。

朝廷ざまに(おほやけざまに、公式に天文博士から)、もののさとししげく(異変の予測が多く報告されて)、のどかならで(不吉にも)、「天つ空にも、例に違へる月、日、星の光見え、雲のたたずまひあり」とのみ(とあるばかりでした。)、

世の人おどろくこと多くて(政府全般に懸念が高まって)、道々の勘文ども(みちみちのかんがへぶみども、陰陽道や神道や僧侶や易学者などがそれぞれの意見書を)たてまつれるにも(見立て申すにも)、あやしく(意味の分からない)世になべてならぬことども(普通とは違う説明や解決法が)混じりたり(混じっていましたが、)。*内の大臣のみなむ(内大臣だけは)、御心のうちに(御心中に)、わづらはしく思し知らるることありける(厄介に思い当たることがあるのでした)。　*注に＜『集成』は「源氏の内大臣だけが、ひそかに困ったことだとお気づきになるところがあった。自分が帝の実の父親でありながら臣下として仕えていることが、凶兆の原因であることを悟る」。『完訳』は「源氏の冷泉帝が自分と藤壷の秘密の子であることへの恐懼であろう。「のみ」の限定にも注意」と注す。＞とある。ところで「内の大臣」は「うちのおとど」と読むようで、そうすると＜帝の身内の大臣＞という感じが良く出て、「内大臣」に相応しい資質らしきものが窺われるような気もする。

［第二段　藤壷入道宮の病臥］

入道后の宮(にふだうきさいのみや)、春のはじめより悩みわたらせたまひて(年初から病がちに成りなさって)、三月には(やよひには)いと重くならせたまひぬれば(たいそう重くお成りになられたので)、行幸(ぎゃうがう、帝の見舞い訪問)などあり(などがありました)。院に別れたてまつらせたまひしほどは(桐壷院に御死別申しなさったときは)、*いといはけなくて(ごく幼くて)、もの深くも思されざりしを(深く悲しみなされなかったが)、いみじう思し嘆きたる御けしきなれば(この自分の大病には帝がひどくご心配なさっているようでいらしたので)、宮もいと悲しく思し召さる(宮もとても悲しい気分に成りなさいます)。　*注に＜「賢木」巻の桐壷院崩御の折、帝は五歳であった。＞とある。

「今年は、かならず*逃るまじき年と思ひたまへつれど(今年は必ず天命を逃れられない年回りだと存じておりまして)、おどろおどろしき心地にもはべらざりつれば(体を壊しましても取り乱

す気持ちでは御座いませんでしたが)、命の限り知り顔にはべらむも(悟り顔で居りますのも)、人やうたて(人目に取り澄まして厭味で)、ことことしう思はむと憚りてなむ(わざとらしく思われるだろうからと晴れない顔をしていたほどで)、功徳のことなども(得度願いの念仏行なども)、わざと例よりも取り分きてしもはべらずなりにける(特にいつもより取り立てては行う事も無く来ております)。　*「逃るまじき年」とは厄年の事らしい。すぐ後に年回りの注釈がある。

参りて(いつか参内いたして)、心のどかに昔の御物語もなど思ひたまへながら(ゆっくりと昔話でもと思っておりましたが)、*うつしざまなる折少なくはべりて(気分の良い日が少ないもので)、口惜しく(残念ながら)、*いぶせくて過ぎはべりぬること(思うに任せず時が過ぎてしまいました)」　*「うつしざま」は「現し様」との表記で＜気持ちが正常でしっかりした状態＞と古語辞典にある。　*「いぶせし」は＜思うように成らず心が晴れない＞と古語辞典にある。

と、いと弱げに聞こえたまふ(と、宮はたいそう弱々しく帝に申し上げなさいます)。

*三十七にぞおはしましける(宮は三十七歳にお成りでした)。　*注に＜女の重い厄年。『完訳』は「当時は、十三・二十五・三十七歳など、生年の十二支がめぐってくる年が厄年とされた」と注す。＞とある。今の女の厄年は一般的に、19 歳・33 歳・37 歳・61 歳、とのこと。

されど、いと若く盛りにおはしますさまを、惜しく悲しと見たてまつらせたまふ(しかし、とても若々しく華やいでいらっしゃる宮がやつれて御出でなのを、帝は惜しく悲しいと拝し申し為されあそばします)。

「慎ませたまふべき御年なるに(厄除け謹慎を為さるべき御年に)、晴れ晴れしからで、月ごろ過ぎさせたまふことをだに(ご気分の優れないまま何ヶ月も過ごして来られたことですら)、嘆きわたりはべりつるに(嘆き続けておりましたのに)、*御慎みなどをも(平癒祈願の祈祷などを)、常よりことにせさせたまはざりけること(いつも以上に特には上げさせ為さっていらっしゃらなかったとは)」と、いみじう思し召したり(と、帝は深く思いつめ為さいました)。　*「おんつつしみ」について、注には＜『完訳』は「精進・潔斎・祈祷など。前の「功徳の事」と照応。前者が死を前提とする仏事であるのに対し、これは寿命を延ばすための仏事」と注す。藤壷は延命を願わない。＞とある。

ただこのころぞ(つい最近になって)、おどろきて(帝は宮の重体に驚いて)、よろづのことせさせたまふ(あらゆる加持祈祷を上げさせなさったのです)。月ごろは(それまでの数ヶ月は)、常の御悩みとのみうちたゆみたりつるを(普通の御不調とばかり考えて油断していらしたことを)、源氏の大臣も深く思し入りたり(随行なさった源氏の大臣も深く悔やみなさいました)。限りあれば(帝は穢れを嫌うことから病人に近付けない決まりなので)、ほどなく帰らせたまふも、悲しきこと多かり(ほどなくお帰りになるにも、悲しく御思いになる事が多くありました)。

宮、いと苦しうて(宮はひどく容態が悪くて)、はかばかしうものも聞こえさせたまはず(捗捗しくは御話申し上げ為されませんが、)。御心のうちに思し続くるに(ご自分の人生を振り返り為されば)、「高き宿世(帝に愛される最上のご縁も)、世の栄えも並ぶ人なく(帝の母となる最上の

栄誉も比べる者が居ないほどだったが)、心のうちに飽かず思ふことも人にまさりける身(それを心から喜べないことも人一倍だった)」と思し知らる(とつくづく御思いに成ります)。

主上の、夢のうちにも、かかる事の心を知らせたまはぬを(帝が夢にもこうした事情をご存知あそばされないのを)、さすがに心苦しう見たてまつりたまひて(さすがに申し訳なく思い申しなさって)、これのみぞ、うしろめたく*むすぼほれたることに(この事だけが不安に思えてならないことが)、思し置かるべき心地したまひける(お心残りのようでした)。　*「むすぼほる」は＜結ばれる＞で＜糸が結ばれて解けないさま＞が原義とある。だから、＜こだわり＞であり＜気掛かり＞でもある。ところで、「うしろめたし」も＜不安だ、気掛かりだ＞である。これでは＜気掛かりで気掛かりになる＞と重複語のように見えてしまうが、絵で言えば＜気掛かりが心のコブに成る＞ということだから＜気掛かりに思えてならなくなる＞とは言い回せる。さらに「思し置く」も＜気掛かりになる＞だから意味は重複していて、言い回しを変えて同じ意味を重ねて思いの深さや強さを表現する語法となっているので、言い換えにも言い回しの工夫を強いられる。

［第三段　藤壺入道宮の崩御］

大臣は、朝廷方ざまにても(政局の観点からも)、かくやむごとなき人の限り(こうした最重要人物ばかりが)、うち続き亡せたまひなむことを思し嘆く(立て続けに亡くなってしまうような事を懸念なさいます)。人知れぬあはれ、はた、限りなくて(しかし個人的な懇意は一層尽きることなく)、御祈りなど思し寄らぬことなし(宮の平癒祈願のご祈祷はあらん限りの手立てをお尽くしなさいます)。

年ごろ思し絶えたりつる筋さへ、今一度(長年思い絶っていらした恋慕を今一度たりとも)、聞こえずなりぬるが、いみじく思さるれば(申し上げず終いになる事がとても胸に迫りなさって)、近き御几帳のもとに寄りて(光君は病苦に伏せる宮の部屋の間仕切り近くに座して)、御ありさまなども、さるべき人びとに問ひ聞きたまへば(御容態などを看病している女房たちにお尋ねになりますと)、親しき限りさぶらひて、こまかに聞こゆ(親しい者だけがお世話に付いていて、詳しくお話し申し上げます)。

「月ごろ悩ませたまへる(この数ヶ月御不調でいらした)御心地に(みここちに、御加減のところに)、御行なひを(おんおこなひを、日課の読経を)時の間もたゆませたまはずせさせたまふ積もりの(上げる時も一息お吐きにもならず疲れが積もって)、いとどいたう*くづほれさせたまふに(ますますひどく衰弱なさり)、このころとなりては、柑子(かうじ、ミカン)などをだに、触れさせたまはずなりにたれば(受け付け為されなくお成りですので)、頼みどころなくならせたまひにたること(良い兆しが見られなくなって御出でです)」　*「くづほる」は＜衰える、弱る、衰弱する＞。

と、泣き嘆く人びと多かり。

「院の御遺言にかなひて(故院の御遺言を守って)、内裏の御後見仕うまつりたまふこと(帝の補佐を御勤め下さっている事を)、年ごろ思ひ知りはべること多かれど(長年存じ上げる事は多かったのですが)、何につけてかは(いつかの機会に)、その心寄せことなるさまをも(その感謝の格別な事を)、漏らしきこえむとのみ(お伝え申し上げたいとばかり)、のどかに思ひはべりけるを

(暢気に思っておりました事が)、今なむあはれに口惜しく(今になってしまいました事が我ながら愚かで呆れます)」

と、ほのかにのたまはするも(と微かな声で宮が仰るのを)、ほのぼの聞こゆるに(窺い知りながら伝え聞きなさって)、御応へも聞こえやりたまはず(お答えも申せ為されずに)、泣きたまふさま、いといみじ(お泣きになる光君の姿は実に沈痛です)。

「などかうしも心弱きさまに(あまり動揺しては、なぜ大臣はこれほどまでに落胆して宮を惜しみなさるのだろうか)」と、人目を思し返せど(人目に怪しまれるのを避けて威儀を正そうとするも)、いにしへよりの御ありさまを(また宮の昔からのお姿を思い返せば)、おほかたの世につけても(世間一般の目からしても)、あたらしく(素晴らしくて)惜しき人の御さまを(失うには惜しまれる人の御容態が)、心にかなふわざならねば(人知を超えた天命で)、かけとどめきこえむ方なく(引き留め申す方法も無いとなれば)、いふかひなく思さるること限りなし(言葉も無いと御思いに成るばかりです)。

「はかばかしからぬ身ながらも(至らないながらも、この身は)、昔より、御後見仕うまつるべきことを(昔から、帝を御支え申上げることを使命として)、心のいたる限り、おろかならず思ひたまふるに(出来る限り尽くしたいと思ってまいりましたが)、太政大臣(おほきおとど)の隠れたまひぬるをだに(が御隠れになった事だけでも)、*世の中(帝の御代である現世が)、心あわたたしく思ひたまへらるるに(果敢無く思われて為りませんのに)、また、かくおはしませば(さらに宮がこのように重篤であらせられては)、よろづに心乱れはべりて(全てが意味を失って)、世にはべらむことも(私が生き永らえることにも)、残りなき心地なむしはべる(名残が持てない気が致します)」　*「世の中こころあわたたし」は＜現世の無常を果敢なむ＞だが、文の構成上は「仕うまつるべきこと」の＜御仕え申す使命＞に対比する形になっていて、何とも意味が把み難い。しかし、「世の中」の＜現世＞とは＜天皇の治世＞でもあった。ということは、この文は＜帝に御仕え申す使命の「世の中」が空しく思えた＞と言う意味になる。これは建前の男性律では有るまじき文だが、本音の女性律では実に説得力のある言い方だ。つまり、光君は＜私にとって帝に仕える事は、それ自体も有意義だが、何よりもその奉仕によって后の宮や岳父を含めた一族が繁栄する事こそが喜びだった＞と心情を吐露し、だから＜あなたを失っては＞「よろづに心乱れはべり」＜自分の生きている意味も無くなる＞と弱気になって泣き言を言った、というワケだ。

など聞こえたまふほどに(などと申し上げなさる内に)、燈火(ともしび)などの消え入るやうにて果て給ひぬれば(はてたまひぬれば、宮がお亡くなりになったので)、いふかひなく悲しきことを思し嘆く(光君は言葉も無く悲しみに暮れなさいました)。

[第四段　源氏、藤壺を哀悼]

かしこき御身のほどと聞こゆるなかにも(貴い御身分と申し上げる方々の中でも)、御心ばへなどの(宮は御性格などが)、世のためしにもあまねく(世に見習うべき例として広く知られた)あはれにおはしまして(慈悲深さでいらして)、豪家に事寄せて(がうけにことよせて、権勢を笠に着て)、人の愁へとあることなども(人の迷惑となることなども)おのづからうち混じるを(知らずにしてしまっていたりするものを)、いささかもさやうなる事の乱れなく(宮は少しもそうした不遜

な過ちが無く)、人の仕うまつることをも(女房たちが宮の為にする世話仕事であっても)、世の苦しみとあるべきことをば(世間が嫌がるようなことは)、止め給ふ(とどめたまふ、止めさせなさるのでした)。

功徳の方とても(善行を積む行いにしても)、勧むるによりたまひて(高僧の勧めに従いなさって)、いかめしうめづらしうしたまふ人なども(荘厳で盛大な法要を為さる人なども)、昔の*さかしき世に皆ありけるを(昔の栄えた時代には良くあったが)、　*「さかし」は＜優れている、賢い＞とあるが、「栄え」「盛り」の語感も否定されていないらしい。此処では文意が通りやすいので「栄え」に依拠した。ただ、＜栄えた時代＞が何時の事なのかは見当がつかない。

これは(この宮は)、さやうなることなく、ただもとよりの宝物(ただ元々あった財産や)、得たまふべき年官(つかさ、官職給付)、年爵(かうぶり、位階給付)、御封(みふ、諸手当)の物のさるべき限りして(の支給額の範囲で)、まことに心深きことどもの限りをし置かせたまへれば(真心のこもった寄付や貧者救済だけをさせていらしたので)、何とわくまじき*山伏などまで惜しみきこゆ(何も分からない野宿者などまでお悔やみ申します)。　*「やまぶし」は＜山岳に住む修行僧＞ともあるが、此処では「何とわくまじき」なので＜野宿者＞。

*をさめたてまつるにも(御葬送申し上げるにも)、世の中響きて(世の中に広く噂されて)、悲しと思はぬ人なし(悲しまない人も無い)。　*「をさむ(納む)」は＜終わりにする＞また＜葬る＞。

殿上人など(御所に参内する役人は)、なべてひとつ色に黒みわたりて(一様に黒一色の喪服姿で)、ものの栄なき*春の暮なり(華やぎの無い晩春でした)。　*「春の暮」は3月末。

二条院の御前の(おまへの、庭先の)桜を御覧じても(ごらんじても、御覧になっても)、*花の宴(はなのえん、光君は12年前の南殿の桜の宴)の折など思し出づ(での宮の晴れ姿などが思い出されてなりません)。　*「花宴」巻は右大臣家の六姫を小部屋に押し込んだ濃密な濡れ場が印象的な巻だったが、その日は正に南殿の桜の宴が開かれた12年前の二月二十日過ぎだった。南殿の桜の宴は朝廷の催事であり、公式の行事としては唯一、藤壺宮が弘徽殿女御を差し置いて首座を占めた晴れ舞台だった。ということは、藤壺宮は父帝の正妻であるということを光君が改めて思い知らされた場面でもあった。その事が光君をして深酒を誘い、六姫との情交へ至る、という流れも読めなくは無い筋だったし、その過ちが結果としては再生への道を開いた、と穿てばなかなかに凝った仕掛けとも思える。マ、いずれにせよ、この場面とは正反対の宮の輝く姿ではあろう。

「*今年ばかりは(今年だけは曇り空に咲け)」と、一人ごちたまひて(葬送の古歌を独り口ごもりなさって)、人の見とがめつべければ(落胆振りを人が怪しみかねないので)、御念誦堂(おんねんじゅだう)に籠もりゐたまひて(籠もり座し為さって)、日一日(ひひとひ、一日中)泣き暮らしたまふ。　*注に＜源氏の口ずさみ。「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」（古今集哀傷、八三二、上野岑雄）を踏まえる。＞とある。さっそくWebサイト「古今和歌集の部屋」の該当ページを参照すると、この歌の詞書が＜堀川のおほきおほいまうちぎみ、身まかりにける時に、深草の山にをさめてけるのちによみける＞とあった。「堀川のおほきおほいまうちぎみ」は史上初の関白太政大臣であった藤原基経(ふじわらのもとつね、836～891)とされる。「堀川」は住所、「おほき」は＜上位の＞で「太政」、「おほい」も＜大きい＞で「大」、「まうちぎみ」は「前つ君(まへつぎみ)」の音便で＜帝の前に控える人の尊称＞を意味するので「臣下」、で即ち＜堀河院の太政大臣＞とい

うことで「藤原基経」をしめす、とのこと。上野岑雄(かむつけのみねを)は、その基経卿が亡くなった時に伏見深草山に埋葬し終えてから詠んだ、ということだから、その深草山の桜に「今年だけは曇り空に咲け」と故人を悼むのは、特に技巧も無さそうで歌としての味わいと言うよりは、その率直な気持ちと想起しやすい風景が説得力を持っているのだろう。因みに、旅案内の Web サイトで墨染寺(ぼくせんじ)の墨染桜(すみぞめざくら)の写真を見たら、ページのコメント通りに「中心部分が薄墨色に見え」て感心したが、「墨染めに」の歌意は＜曇り空＞だと思う。

夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色(にびいろ、灰色)なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど(どんな風景にも何も感じないころだったが)、いとものあはれに思さる(これだけは感慨深くお思いでした)。

「入り日さす峰にたなびく薄雲は、もの思ふ袖に色やまがへる」(和歌 19-07)

「沈む夕日に掛かる雲、濡らす喪服の袖の色」(意訳 19-07)

人聞かぬ所なれば(誰も聞く人が居ない所なので)、かひなし(響く心はありません)。